

# 「反復」と「差異」 —1940年代前半期における植民地の「国民文学」 尹大石(ユン・デソク)『植民地国民文学論』を読む

高橋 梓

## 目次

はじめに

1. 本書の構成

2. 帝国日本の「国民文学」と植民地朝鮮の「国民文学」

3. 植民地の「国民文学」にみられる三つの主体化

おわりに

## はじめに

尹大石『植民地国民文学論』(ソウル: ヨクラク、2006年)は、これまで「親日」／「反日」という二項対立的な枠組みによって「親日文学」とされてきた1940年代前半期の朝鮮人の創作を、植民地の「国民文学」という枠組みでとらえなおしたものである。

1940年代前半期の朝鮮人の創作は、「朝鮮文学」の「暗黒期」として一般的に理解されてきた。1937年7月に日中戦争が勃発し、アジア・太平洋戦争(1941年12月8日)へと展開していった1940年代前半期において、帝国日本は植民地朝鮮の兵站基地化を図り、精神面における日本人化のための政策が行われた。具体的には、「皇国臣民の誓詞」の制定(1937年10月)、陸軍特別志願兵令の施行(1938年4月)、第三次朝鮮教育令(1938年4月)による日本語教育の強化(朝鮮語は選択科目となった)、そして創氏改名の実施(1940年2月)などを挙げることができる。政策の背景には、朝鮮総督南次郎が「半島人ヲシテ忠良ナル皇国臣民タラシムル」(「道知事会議ニ於ケル総督訓示」1939年5月29日)と提唱した「内鮮一体」が基本方針として存在していた。

これらの同化政策は、植民地朝鮮のメディア状況にも影響を与えた。植民地朝鮮では、1940年8月に朝鮮語新聞『朝鮮日報』と『東亜日報』が、そして1941年4月には朝鮮語文芸雑誌『文章』(1939年2月創刊、李泰俊主宰)と『人文評論』(1939年10月創刊、崔載瑞主宰)が、総督府による雑誌統廃合により廃刊になった。

一方で、『緑旗』(1936年1月)、『東洋之光』(1939

年1月)『国民新報』(1939年4月)、『内鮮一体』(1940年1月)、『国民詩歌』(1941年9月)、『国民文学』(1941年11月)などの日本語雑誌が創刊されていった。また、『朝光』(1935年11月)、『三千里』(1929年7月創刊、1942年5月『大東亜』に改題)、『新時代』(1941年1月)、『野談』(1935年12月)『春秋』(1940年11月)、『毎日新報』(1938年4月29日<sup>1)</sup>)などの朝鮮語雑誌・新聞においても、日本語の紙面が増えていった<sup>2</sup>。1942年5月5日に国民総力朝鮮連盟が発表した「国語普及運動要項」において、「文学、映画、演劇、音楽方面において極力国語〔日本語一引用者〕使用を奨励する」とされたことからわかるように、この時期の朝鮮語創作は抑制されていた。反面で、朝鮮人の日本語創作は増えていった<sup>3</sup>。解放直後には、1940年代前半期に日本語で創作した朝鮮人作家による自己批判が行われ<sup>4</sup>、この時期は朝鮮文学の「暗黒期」として長い間タブー視されることになる。

朝鮮文学の「暗黒期」の作品—いわゆる「親日文学」—をめぐり体系的な研究として最初に登場したのが、林鐘国『親日文学論』(ソウル: 平和出版社、1966年。日本語版は大村益夫訳『親日文学

<sup>1</sup> 前身である朝鮮語新聞『大韓毎日申報』は1904年7月に創刊され、日韓併合後、1910年8月に朝鮮総督府が買収し『毎日申報』と改題。その後1924年に分離独立し、1938年4月29日より『毎日新報』と改題した。

<sup>2</sup> 尹大石『植民地国民文学論』亦楽、2006年；尹大石『『国民文学』の日本人小説家』(木村一信、崔在喆編『韓流百年の日本語文学』人文書院、2009年に収録)を参照。

<sup>3</sup> 朝鮮人作家による朝鮮語・日本語作品数の推移は、任展慧『日本における朝鮮人の文学の歴史』(法政大学出版局、1994年)の「朝鮮語と日本語の文学作品数」(p. 234)を参照。具体的な日本語作品のリストは、木村一信、崔在喆編『韓流百年の日本語文学』(人文書院、2009年)に収録された「韓流百年の日本語文学—作品年表」(pp. 314-323)を参照。

<sup>4</sup> 「文学者の自己批判〔文学者の自己批判〕」『人民芸術』第2号、1946年10月。金南天、李泰俊、韓雪野、李箕永、金史良、李源朝、韓暁、林和など、解放後の民族文学建設運動を主導していた文学者が参加した。

論』高麗書林、1976年<sup>5)</sup>である。『親日文学論』では、当時の「親日」文化機構や、団体および団体活動に、個々の作家がいかに関わっていたかが詳細に明らかにされた。

林の問題関心は、1940年代前半期の朝鮮人作家や作品の「親日」性であり、朝鮮文学がいかに「主体性」を「喪失」<sup>6)</sup>していたかを明らかにすることであった。この問題関心は、韓国において1970年代前後に展開された民族—民衆文学論と関連している。金哲によると、解放後の韓国で展開された民族文学論は、植民地支配、朝鮮戦争、朝鮮半島の分断、軍事独裁政権など、韓国が置かれてきた被抑圧的な歴史状況の中で、民族の抵抗の理論的な拠点として存在した文学・文化運動であった<sup>7)</sup>。林鐘国が「親日文学」に注目し、「こんご韓国の国民精神に立脚し、韓国の国民生活を宣揚する、韓国の国民文学を樹立しようとする人々のために、かれらの植民地的国民文学はよい参考資料となる」<sup>8)</sup>としたことは、分断体制、冷戦体制、軍事独裁政権を克服する統一国家の建設に向けて、民族文学論を切実なものとした韓国の状況と深く関連していた。

一方、1990年代から2000年代にかけて、韓国では雑誌『当代批評』<sup>タンデビジョン</sup>の論者を中心に、歴史学、文学、人類学など様々な分野において、民族主義言説が批判されるようになる<sup>9)</sup>。その一つの流れとして、民主化運動の中で展開された民族文学論を問い直す試みが、金哲によって行われた<sup>10)</sup>。金哲は、民族文学論が「国粋主義や国家主義との混同の危険にも関わらず、その概念を通じて韓国の近代文学の最良の伝統を守護し堅持しようとした歴

史的事実は、それなりに評価されねばならない」<sup>11)</sup>と、民族文学論が持つ文学・文化運動としての価値を認めながらも、それらが「民族」「民衆」をめぐる問いを欠いたまま、民族の特殊性や単一性、民衆の純潔さや偉大さを主張してきたところに、帝国主義国家とは異なる形の民族主義の問題を発見した。

こうした韓国の研究動向は、日本の研究動向とリンクするものであった。宮田節子の「皇民化」政策をめぐる研究では、日中戦争以降、植民地支配の基本方針として提唱された「内鮮一体」が「アメイバーのごとくに不定形であったがゆえに、さまざまな立場の人々を呑み込むことを可能にし」<sup>12)</sup>、朝鮮知識人の「差別からの脱出」の論理としての「内鮮一体」論を生み出したことが明らかにされた。そして、駒込武の植民地帝国の「文化統合」をめぐる研究<sup>13)</sup>は、「おもに教育政策史の側面から日本という「国民国家」の「帝国」化の過程に注目し、台湾、朝鮮、満州と植民地本国・日本との構造連関を描出」<sup>14)</sup>するものであった。これらの、帝国と植民地の相互作用を解明する、80年代から90年代にかけて行われた「帝国史」研究は、その後「対日協力」や「植民地公共性」・「植民地近代性」(colonial modernity)をめぐる研究へと展開され、朝鮮の近代史の再検討が行われていった<sup>15)</sup>。また、韓国『当代批評』に掲載された多くの論文が日本語に翻訳され、日本の読者に紹介されたのもこの時期であった<sup>16)</sup>。

<sup>11)</sup> 金哲、前掲論文、p. 195。

<sup>12)</sup> 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未来社、1985年、p. 148。

<sup>13)</sup> 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996年。

<sup>14)</sup> 三ツ井崇「朝鮮」日本植民地研究会編『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社、p. 98。

<sup>15)</sup> 研究の流れについては、三ツ井崇前掲論文を参照。

「植民地公共性」については、並木真人「植民地期朝鮮における「公共性」の検討」(三谷博編『東アジアの公論形成』東京大学出版会、2004年)、並木真人「「植民地公共性」と朝鮮社会—植民地期後半期を中心に」(朴忠錫・渡辺浩『「文明」「開化」「平和」—日本と韓国』慶応義塾大学出版会、2006年)を参照。

<sup>16)</sup> 上述した金哲論文の他に、林志弦(板垣竜太訳)「朝鮮半島の民族主義と権力の言説 比較史的問題提起(1)」『現代思想』2000年6月；金恩実(中野宣子訳)「民族言説と女性—文化、権力、主体に関する批判的読み方のために」『思想』2000年8月；金恩実(中野宣子訳)「韓国近代化プロジェクトの文化理論と家父長性」『現代思想』2001年

<sup>5)</sup> 以下、林鐘国『親日文学論』は日本語版から引用する。

<sup>6)</sup> 林鐘国『親日文学論』高麗書林、1976年、p. 1。

<sup>7)</sup> 金哲(崔真碩訳)「韓国の民族—民衆文学とファシズム 金芝河の場合」(『現代思想』2001年12月)の議論を参照。

<sup>8)</sup> 林鐘国、前掲書、p. 468。

<sup>9)</sup> 文富軾主幹の季刊誌『当代批評』(1997年9月～2005年2月、現在は休刊中)の論者の議論を参照。カン・ジュンマン他『レッド・コンプレックス』三仁、1997年；林志弦『われらの内なるファシズム』三仁、2000年；金哲編『文学の中のファシズム』三仁、2001年。また、『当代批評』の動向については、文富軾(板垣竜太訳)『失われた記憶を求めて—狂気の時代を考える』(現代企画室、2005年)の「訳者あとがき」に詳しい。

<sup>10)</sup> 金哲『国文学を超えて』国学資料院、2000年。金哲が本書において展開した議論は、『現代思想』に訳出された金哲前掲論文を参照した。

このような研究動向をうけて、いわゆる「親日文学」をめぐる近年の研究がどのように展開していったかを明らかにするために、本稿では 1940 年代前半期の朝鮮人の創作—いわゆる「親日文学」—をめぐり、植民地の「国民文学」という問題枠組みで論じた体系的な研究である、尹大石『植民地国民文学論』（亦楽、2006 年）を読み解いていく。

先に引用したように、林鐘国は、韓国の国民文学形成のための「よい参考資料」として「親日文学」に注目した。朝鮮文学がいかに「主体性」を「喪失」していたかを明らかにするために、「親日文学」に焦点を当てた林鐘国の議論においては、植民地期における朝鮮人の主体形成の問題は看過されることになった。それに対し、1940 年代前半期の朝鮮人の創作から朝鮮人の主体の問題を読み取った近年の研究として趙寛子や三原芳秋<sup>17</sup>、そして尹大石の研究を挙げることができるだろう。

また、尹大石の近著、尹大石『植民地文学を読む』（ソミョン出版、2012 年）があるが、本稿ではより体系的な研究である『植民地国民文学論』を扱うことにする。

本書を読み解いていく上で、以下の点に注意したい。

第一に、本書において設定された、植民地の「国民文学」という問題枠組みである。林鐘国によると、「親日文学」は民族の利益に反して当時の日本軍国主義ファシズムの論理を主体性なく反復したもの、すなわち「主体的条件を没却した盲目的事大主義的日本礼賛・日本追従を内容とした文学であり、ひいては売国的文学」<sup>18</sup>である。「親日文学」をめぐり、それらがファシズムの論理を主体性な

く「オウムのように」<sup>19</sup>反復したものとして批判的に認識するのが、林鐘国の議論である。それに対し、尹大石は当時の朝鮮人の作品・評論がファシズムの論理を「オウムのように」反復したことを認めながらも、同時に主体化が行われたことに注目する。

この点は、本書の「国民文学」という問題枠組みと関連する。辞書では「国民文学」は以下のように説明されている。

- ①一国の国民性または国民文化のあらわれた、その国民に特有な文学。また、その国で広く愛読され、評価されているその国を代表する文学。
- ②近代国家成立に伴ってつくられ、その国家意識を反映して多数の民衆に浸透する規模の文学。特に、独立途上の国などでは国の解放、独立への声の反映されたもの。<sup>20</sup>

尹大石が扱うのは、国民文化や形態がもともと存在するものとした①の概念としての「国民文学」ではなく、②の概念であることに注意したい。

尹は、19 世紀中盤プロイセンを中心にドイツという国民国家が形成されていく時期に、「国民文学」をめぐる議論が活発だったことを例に挙げながら、「国民文学」概念の起源はヨーロッパにおける国民国家形成期にあると説明した<sup>21</sup>。そして尹は、「国民文学」が問われるのは、国民国家の境界が揺らぐ時—国民国家が他国を侵略したり、または他国に侵略される時—であるとした<sup>22</sup>。

尹は日本と朝鮮で「国民文学」が問われた時期を以下のように整理している。日本では 1900 年代前後の国民形成期、1930 年代末から 1940 年にかけての時期、そして 1950 年代において「国民文学」が問われた。それに対し、朝鮮では 1920 年代、1940 年代前半期、そして解放後の国家形成期において

5 月；文富軾（板垣竜太訳）「「光州」20 年後—歴史の記憶と人間の記憶」『現代思想』2001 年 7 月臨時増刊号；尹海東（藤井たけし訳）「植民地認識の「グレーゾーン」—日帝下の「公共性」と規律権力」『現代思想』2002 年 5 月。

<sup>17</sup> 趙寛子『植民地朝鮮／帝国日本の文化連環—ナショナリズムと反復する植民地主義—』有志舎、2007 年；三原芳秋「崔載瑞の Order」『사이間 SAI』4 号、2008 年 5 月；三原芳秋「Metoikos たちの帝国—T.S.エリオット、西田幾多郎、崔載瑞」『社会科学』2011 年 2 月；三原芳秋「「国民文学」の問題」『JunCture 超域的日本文化研究』2 号、2011 年 3 月。

<sup>18</sup> 林鐘国、前掲書、p. 1。

<sup>19</sup> 尹大石、前掲書、p. 15。

<sup>20</sup> 『日本国語大辞典第 2 版』第 5 巻、小学館、2001 年、p. 610。

<sup>21</sup> 尹大石「1940 年代「国民文学」研究」ソウル大学大学院国語国文学科国文学専攻博士論文、2006 年 2 月、p. 49。

<sup>22</sup> 尹大石、同前、p. 49。

「国民文学」が問われた<sup>23</sup>。

1900年代・1950年代の日本と1920年代・解放後の朝鮮においては「民族文学」という意味で「国民文学」が問われたのに対し、本書では1930年代末から1940年の日本、そして1940年代前半期の朝鮮の「国民文学」を区別した上で扱っている。1930年代末から1940年にかけて、日中戦争、アジア・太平洋戦争を経る中で、帝国日本の「国民」が再定義されるにあたり、「国民文学」が必要とされた。さらにそれを1940年代前半期にかけて「模倣」したのが、植民地朝鮮の「国民文学」であった。

第二に、尹大石が植民地の「国民文学」という枠組みを通して、『当代批評』論者の問題意識を引き継いでいる点である。例えば、林鐘国は雑誌『国民文学』を以下のように評価する。『国民文学』は、最初は「年四回国語版、八回諺文〔朝鮮語一引用者〕と云ふ新しい行き方で当時の情勢に対処して来た」<sup>24</sup>が、1942年5・6月合併号より全文国語（日本語）雑誌として再出発することになった。林鐘国は『国民文学』が「最初から当局の国策宣伝誌」<sup>25</sup>として「徴兵制実施と表裏一体をなす国語普及運動」<sup>26</sup>に同調したと評価している。雑誌『国民文学』をめぐる林鐘国の評価からは、植民地期の朝鮮人の創作を帝国の「国民文学」に包摂されたものとし、「主体性」を「喪失」した朝鮮文学—いわゆる「親日文学」—とした林鐘国の視座を見て取ることができる。

これに対し、尹大石は、1940年代前半期の朝鮮人の創作は、帝国日本の「国民文学」を「模倣」した植民地の「国民文学」であり、そこから様々な主体化の試み（「反復」と「差異」）を読み取ろうとした。

いわゆる「親日文学」から朝鮮人の主体化の問題を読み取ろうとした尹大石の問題意識は、民族主義言説において「民族」「民衆」が客観化されなかったことを省察すると共に、植民地主義、ファシズム、近代規律権力をめぐる議論へと開いていた金哲ら『当代批評』の論者の問題意識と共通

するものである。しかし、民族文学論がファシズム言説に変容しうる問題を指摘した金哲の議論は、主体化の試みに見られる「反復」に重点を置くものだといえる。それに対し、尹大石は主体化の試みが「反復」と共に「差異」を生み出すことに注目している点に注意したい。

## 1. 本書の構成

以下、尹大石『植民地国民文学論』を読み進めていくが、その前に本書の構成について言及しておく。本書は以下のような構成になっている。

### 序文

#### 第1部 植民地国民文学論

- 第1章 植民地国民文学論Ⅰ—1940年代前半期「国民文学」の論理と心理
- 第2章 植民地国民文学論Ⅱ—日本の影
- 第3章 韓国におけるポストコロニアル研究

#### 第2部 抵抗と協力を横断する創作

- 第1章 植民地人の二つの模倣様式—植民地主義を越えた二つの方式
- 第2章 言語と植民地—1940年前後の言語状況と韓国文学者
- 第3章 植民地における国民化
- 第4章 国民文学の両面価値
- 第5章 植民地自律主体と帝国—崔秉一の日本語短編小説集『梨の木』

#### 第3部 植民地他者の表象

- 第1章 「満洲」と韓国文学者
- 第2章 植民者の文学

#### 第4部 読書

- 1. 構造主義的認識の成果と限界—キム・イエリム『1930年代後半の近代認識の型と美意識』ソミョン出版、2004年
- 2. 「兵役拒否」と「国民」をめぐる省察—イ・ナムソク『良心による兵役拒否と市民不服従』グリーンビー、2004年—クオン・ヒョクポム『国民からの脱退』三仁、2004年
- 3. 辺境から眺める歴史と文学

<sup>23</sup> 尹大石、同前、p. 49。

<sup>24</sup> 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」『国民文学』1942年8月、p. 13。

<sup>25</sup> 林鐘国、前掲書、p. 51。

<sup>26</sup> 林鐘国、前掲書、p. 52。

第1部「植民地国民文学論」では、本書の議論の全体的な脈絡が示されている。特に第1章「植民地国民文学論Ⅰ」が本書の議論の要約部分に該当し、第2章の「植民地国民文学論Ⅱ」は、本書における問題提起の性格を持つものである。第2部・第3部は、「模倣」「国民化」「同化・異化」「サバルタン」「他者」（「満洲」、日本）という概念を軸に、植民地の「国民文学」の様々な断面図を考察したものである。第4部には、先行研究の書評、韓国の兵役拒否をめぐる二冊の本の書評、そして金史良ら植民地期の朝鮮人作家をめぐる一問一答形式の文章が収録されており、これらを併せて読むことで、本書の議論の理解をより深めることができるだろう。

また、尹大石自身が指摘するように、本書は尹がこれまで発表してきた論文を収録したものであるため、扱っている内容に重複する部分が多く見られる<sup>27</sup>。本稿では、植民地の「国民文学」をめぐる議論を扱うにあたり、第1部、第2部、第3部の議論に焦点を当て、そこで行われた議論を再構成しながら本書を読み進めていく。

以下の節では、まず本書の第1部の議論を中心に、本書における問題枠組みである植民地の「国民文学」について扱う。その上で、第2部・第3部の議論を中心に、これまで「親日文学」とされてきた朝鮮人作家の作品の読解に、植民地の「国民文学」という枠組みがいかに介入しうるかについて見ていきたい。

## 2. 帝国日本の「国民文学」と植民地朝鮮の「国民文学」

本節では、本書を通して尹大石が設定した「国民文学」という問題枠組みについて詳しく見ていく。

まず本書では、植民地の「国民文学」の背景として、植民地における朝鮮人の国民化と支配者の関係が論じられている。尹は「内鮮一体」を志向する朝鮮人が、「国語（日本語）」に対し朝鮮語を「苦悶の種」<sup>28</sup>としたこと、また朝鮮の雑誌において国民教育や徴兵制（1942年5月実施）の問題が積極的に取り上げられたことに注目する（第1

部第2章）。これは、林鐘国の視座では、徴兵制を肯定する「親日」の立場とされ批判される。しかし、朝鮮知識人が皇民化を受け入れたのは、皇民化が近代的性格を含んでいたからであった。尹は、朝鮮の雑誌における国民教育や徴兵制の特集において、徴兵制を機に朝鮮人が規律正しくなり、すばらしい国民になることができるとされていたことを指摘した。

また、朝鮮人作家の小説に描かれるラジオ体操に焦点を当て、それが近代的時間に対する同調装置として個々の身体と時間をどのようにつなぎあわせ、新しい社会制度として植民地の人びとをいかに従属させたかを論じた（第2部第3章）。

しかしここで注意すべきなのは、本書が植民地の「国民文学」を「植民地本国の言説をそのまま受け入れるのではなく、植民地の文脈で再構成するもの」<sup>29</sup>とした点である。

本書では、日本人作家が朝鮮をどのように表象していたか（第1部第1章、第2部第4章、第3部第2章）をめぐる議論を通して、植民地に対する政策が植民地を統合する性格を持ちながらも、他方で植民地を排除する性格を持っていた問題が論じられた。このような帝国の言説を、尹はホミ・バーバの言葉を借りて、植民地支配者は「二枚舌で語る」<sup>30</sup>と説明している。この「二枚舌」の特徴があったからこそ「ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体」<sup>31</sup>が「再構成」されたことを指摘している点が、本書の議論において重要である。

尹はこのような「差異の主体」の「再構成」がみられる具体的な例として、「朝鮮文化の将来と現在」或は「文化に於ける内鮮一体の途はどこにあるか」<sup>32</sup>という議題のもと行われた、日本知識人と朝鮮知識人の座談会<sup>33</sup>を挙げている。

<sup>29</sup> 尹大石、前掲書、p. 21。

<sup>30</sup> ホミ・K・バーバ（本橋哲也他訳）『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局、2005年、p. 148。

<sup>31</sup> ホミ・K・バーバ、前掲書、p. 148。

<sup>32</sup> 「朝鮮文化の将来」『文学界』1939年1月、p. 271。

<sup>33</sup> 「朝鮮文化の将来と現在」（『京城日報』1938年11月29日～12月7日）、「朝鮮文化の将来」（『文学界』1939年1月）にそれぞれ掲載された。日本側の出席者は、辛島驍（京城帝国大学教授）、古川兼秀（総督府図書課長）、林房雄（小説家）、村山知義（小説家、座談会の前月に

<sup>27</sup> 尹大石、前掲書、pp. 6-7。

<sup>28</sup> 「編集後記」『国民文学』1942年5・6月合併号。

林房雄を中心に、1938年11月下旬に京城（ソウル）で行われたこの座談会では、日本知識人による朝鮮文学への関心が示され、朝鮮人作家の日本語創作が日本知識人によって主張された。その主張に対し、朝鮮人作家が反対の意を示し、議論になったことで有名である<sup>34</sup>。

日本語創作に反対する朝鮮人作家の態度が、朝鮮人の「ひねくれ」と日本人に評されたことを受けて、朝鮮人作家・張赫宙は朝鮮知識人に向けた文章「朝鮮の知識人に訴ふ」<sup>35</sup>を発表した。張赫宙は、日本人から朝鮮人が「ひねくれ」とされた問題について、その「ひねくれ」は朝鮮人による「内鮮一体」によって解消されるものとした。このような張赫宙の議論は、日本知識人の立場を代弁するよう見える。しかし、張赫宙の文章では、朝鮮人の「ひねくれ」が生じる原因についても言及されている。張赫宙は、朝鮮人の「ひねくれ」は植民地的心理（植民地の自己保護本能）によるものだとしている。これは、「ひねくれ」の原因は植民地状況にあることを逆説的にあらわしている。日本知識人が朝鮮人の「ひねくれ」と評したものは、植民地本国の議論を植民地の現実に適応させ変形させる時に生じる「差異」のあらわれであった（第1部第1章）。

また、植民地における主体の「再構成」は、日本の「国民文学」論が朝鮮でどのように受け入れられたかを見てみることで明らかにする。

上述したように、日本における「国民文学」論が1937年から1940年末にかけて活発であったのに対し、植民地では1941年以降に「国民文学」論が活発になった。日本の「国民文学」論の代表的な論客であった浅野晃の議論を詳細に整理した三原の議論からわかるように、1937年と1940年の浅野の「国民文学」論の間には差異がみられる<sup>36</sup>。

---

新協劇団によって行われた朝鮮の古典『春香伝』公演の演出担当）、張赫宙（小説家、『春香伝』の日本語翻訳・脚色）、秋田雨雀（劇作家）がいた。そして朝鮮側の出席者として、鄭芝鎔（詩人）、林和（詩人、評論家）、兪鎮午（小説家、普成専門学校教授）、金文輯（評論家）、李泰俊（小説家、雑誌『文章』主宰）、柳致眞（劇作家）がいた。

<sup>34</sup> 任展慧「植民地政策と文学」『法政評論』復刊第1号、1970年など。

<sup>35</sup> 張赫宙「朝鮮の知識人に訴ふ」『文芸』1939年2月。

<sup>36</sup> 三原芳秋「「国民文学」の問題」『JunCture 超域的日本

1937年には日中戦争における中国の団結に対抗するために「国民」の再定義が求められたのに対し、1940年には近衛新体制運動を通して英米帝国主義に対抗するために「国民」の再定義が求められていた。よって、浅野の「国民文学」論も、1937年には市民文学を範とする「近代主義」的傾向を持っていたのに対し、1940年には「日本主義」的言説が目立つことになる。しかし、1937年の浅野の「国民文学」論が普遍主義であり、1940年に「日本主義」という特殊主義に転落したということではなく、むしろ浅野の「国民文学」論の普遍主義には、特殊主義の特徴も含まれていたということの意味するのである。

尹によると、朝鮮の「国民文学」論は1941年以降に活発になったが、1940年の浅野の「国民文学」論にみられた「日本主義」を繰り返すものではなかったという。例えば、1941年に「国民文学」論を朝鮮に紹介した韓植は、初期に浅野が論じた「国民文学」論を紹介した。さらに韓はゲーテの言葉を引用しながら「国民的文学である以上、それは国民の精神生活を背景にした個性の表現であるには違いないが、それは同時に次の時代の精神生活を構成しうる力であり、固陋な人種の偏見とは決別した自由な人間性の文学」<sup>37</sup>であるとし、それは1940年の浅野の「国民文学」論の「日本主義」とはかけ離れたものであった。

また、尹は植民地における主体の「再構成」を、「新地方主義」という概念を通して説明している。これは、崔載瑞や金鐘漢によって、雑誌『国民文学』初期において展開された議論であった。具体的には、朝鮮文学は日本文学の一部であることを認めながら、朝鮮の独自の文学や伝統を認めるべきだという議論が展開される。「全体主義的社会機構においては東京も一つの地方と考えるのが正しいであろう。というよりは、地方とか中央とかいう言葉からして政治的親疎を付随してよくない。東京も京城も同一の全体内における一つの空間的単位にすぎない」<sup>38</sup>と金鐘漢が述べているが、ここでいう中央とは、朝鮮が中心になることを意味

---

文化研究』2号、2011年3月、pp. 109-110。

<sup>37</sup> 韓植「国民文学の問題」『人文評論』1941年1月、p. 54。原文は朝鮮語。

<sup>38</sup> 金鐘漢「一枝の倫理」『国民文学』1942年3月、p. 36。原文は朝鮮語。

するのではない。金の議論は、帝国において中心は特定な所に存在するのではなく、様々な所に存在する可能性を示唆するものであった。このように、「新地方主義」は中心を持たない権力が遍在する、「帝国」的な形態を前提とする思想であったが、朝鮮や朝鮮文学を考える知識人にとっては積極的な機会として受け入れられることになったのである。そして尹は、このような欲望は雑誌『国民文学』に限定して見られたのではなく、当時の朝鮮知識人に共感されるものであったと指摘している（第1部第1章）。

尹大石は、植民地における皇民化政策を通して朝鮮人の国民化が行われながらも、そこに「ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体」が「再構成」されたことを、座談会の議論や「新地方主義」の議論の分析を通して明らかにした。そして、植民地の「国民文学」も、帝国の「国民文学」に単に包摂されたのではなく、「差異の主体」として「再構成」されたものとして分析するのが、本書の基本的な問題枠組みである。

### 3. 植民地の「国民文学」にみられる三つの主体化

尹は植民地の「国民文学」という問題枠組みを通して、作品の読解に介入しながら朝鮮人の主体形成について分析している。しかし、ここでいう主体の「再構成」は、民族主義言説が主張してきた民族の主体を意味するのではない。尹は、植民地の「国民化」の「差異」が多様な「国民化」をめぐる主張を生み、時には本質主義として、時には帝国の統合を強めるものとして、時には政策に対する「嘲笑」として作品にあらわれたことを明らかにした。

まず、尹大石が朝鮮人作家と「国語（日本語）」、朝鮮語の関係について、以下のように論じている部分を見てみたい（第2部第2章）。

植民地への単一言語政策によって、1942年5月に「極力国語使用を奨励する」ことになり、朝鮮人にとって朝鮮語は「苦悶の種」となったかのように見えた。しかし「国民文学」と同様に、「国語」も最初から存在したものではなく、標準日本語は植民地支配を通して形成されていった。よって、植民地に「国語」が一方的に普及したのではなく、むしろ朝鮮語の体系に影響を与えるものであり、

規範語としての朝鮮語は植民地期にまとめられた。

尹大石によると、この時期に朝鮮語創作をめぐる朝鮮人作家の三つの立場が生じたという。

第一に、日本語を外国語とし、それに対して準国語としての朝鮮語の特権性を主張する立場である（韓暁、李泰俊）。これは、朝鮮的なものは朝鮮語でしか表現できないという本質主義の立場であり、朝鮮人の日本語創作を否定する。

第二に、日本語を「国語」とし、それに対して地方語としての朝鮮語の存在を主張する立場である（張赫宙、金龍濟）。これは、朝鮮人の日本語創作を排除する準国語としての朝鮮語というところを否定し、朝鮮人の日本語創作の存在を認めている。しかしそれは、朝鮮語より日本語の方が強い言語であるため、朝鮮語は日本語に同化すべきだという論理によるものであった。

第一・第二の立場は、一国家の言語を単一言語に統一すべきだという「国語」の論理に基づいているが、第三の立場はそれに異を唱えるものであった（林和、金史良）。この立場は、作家の創作言語は状況（読者の存在、作家の言語能力）によって決定されるべきだと主張する。この立場に基づいて朝鮮人の日本語創作を主張することは、一国家の言語を単一言語に統一しなければならないとする「国語」の論理に反対する立場を取り、植民地本国の言語であり「国語」である日本語の特権性を認めるものではなかった。

このような「国語」をめぐる分裂した議論に対応する形で、尹は1940年代前半期の朝鮮人の作品から、本質主義（朝鮮人にとっての朝鮮語を絶対化する立場）、帝国への統合（朝鮮語を地方語とし、「国語」に同化すべきものとする立場）、「嘲笑」（一国家の言語を単一言語に統一することに反対する立場）という三つの主体化の形を読み取っている。

第一に、本質主義による主体化がある。第2部第1章では、日本の読者に朝鮮文学を紹介した初の本格的な例である「朝鮮文学特集」（『文芸』1940年7月）に焦点を当て、朝鮮人作家の「朝鮮」表象における「本質主義」が指摘された（第2部第1章）。

尹は、共に朝鮮文学を論じている林和（「現代朝鮮文学の環境」）と林房雄（「朝鮮の精神」）の評論

を比較しながら、そこで用いられた主語に注目する。林房雄が「文学は」という主語を使っていることについては、林が自らを普遍としており、アジアを真の連帯の対象ではなく啓蒙の対象、皇民化の対象としたと分析した。それに対し、「朝鮮文学は」という主語を使った林和は、自らを普遍とした林房雄の議論に抗するものとして配置することもできるが、尹は林和の文章も本質主義の立ちあげには抗せず、むしろ朝鮮民族の本質を立ち上げることになることを指摘した。尹大石は、朝鮮の読者に向けて書いたものと比べ、他者（日本の読者）に向けて自らを表象するときには本質主義が強調されるとした。

尹大石はこのような本質主義を、林鐘国が「反国民文学的な立場」<sup>39</sup>と評した朝鮮人作家・李孝石の「ほのかな光」（『文芸』1940年7月）からも読み取っている。日本人の美術館長・堀から古刀を守ろうとする主人公の執着は、朝鮮の精神を守る必死の努力として見ることもできるが、それは皮肉にもエキゾチズムの「模倣」となったのである。

次に、第二・第三の主体化では、帝国への統合（「差異の縫合」）、「嘲笑」（「差異の拡大」）が指摘される。これら二つは、対称的な主体化の形である。つまり、共に植民地の「国民化」を「模倣」しながら、帝国に同化することで主体化するか、あるいは帝國的制度に組み込まれながらも自分たちの制度によって再解釈することで主体化するか、という点で対称的であった。

尹大石は帝国への統合（「差異の縫合」）を、李石薫の一連の作品「夜」（『国民文学』1942年5・6月合併号）、「善霊」（『国民文学』1944年5月）、金史良の作品「草深し」（『文芸』1940年7月）の登場人物から読み取っている。これらの人物からは、それぞれ国民化のための努力を読み取ることができる（第1部第1章、第1部第2章、第2部第1章）。

尹大石は、李石薫「夜」において、主人公である朝鮮人作家が、日本人になるためには「いゝ人」「立派な人」になるべきだと語っている点に注目する。これは朝鮮人が「国民」になるために設定されていた基準であるが、この基準が曖昧である

ために、朝鮮人にとって日本人は到達できない場所にあったことがわかる。

また、李石薫「善霊」の主人公が緑旗連盟を脱退して満洲に行ったこと、そして金史良「草深し」において二重言語話者が日本語（「国語」）を使うことに注目する。日本人との「差異」が埋まらなかった結果、満洲行きや日本語使用によって、満洲や植民地民衆を新たに「差異」の対象としてつくり上げることによって、植民地日本人との「差異」をなくそうとする方式を見ることができるとした。

ここで、尹が本書で用いる「自己植民地化」<sup>40</sup>（小森陽一）という概念に言及しておきたい。これは、ホミ・バーバの議論（「模倣」と「差異」）を、近代日本の成立の議論に当てはめた小森陽一の議論である。小森は、近代日本の成立は「自己植民地化」のプロセスであったという議論を展開する。近代日本は、欧米列強によって植民地化されるかもしれないという危機的状況に蓋をし、あたかも自発的意志であるかのように、「文明開化」というスローガンをあげて、欧米列強の「万国公法」の論理を「模倣」した。小森はこのようなあり方を「自己植民地化」ととらえ、帝国日本はこの事実を忘却・隠蔽することで「植民地的無意識」を構造化したという。さらに、その「模倣」のためには、日本は周辺に「野蛮」を発見し続ける必要があった。

尹は本書で論じた植民地の第二の主体化の主張に、この「植民地的無意識」の構造を読み取っている。つまり、自発的意志であるかのように近代化、啓蒙化というスローガンをあげて帝国日本を「模倣」し、国民化したことは、植民地における「自己植民地化」の繰り返しだというのである。

最後に、尹は「差異の縫合」に対し、対称的な主体化の形である「嘲笑」（「差異の拡大」）について論じている。具体的には、金史良「草深し」、崔秉一『梨の木』、そして「満洲開拓小説」である韓雪野の「大陸」において見られる特徴として挙げている。これらの作品は、一見すると単に植民地政策とそれを受け入れた朝鮮人が描かれたものである。しかし、尹はこれまで見てきたような政策をめぐるアンビヴァレンスが、朝鮮人にずれた形

<sup>39</sup> 林鐘国、前掲書、p. 326。

<sup>40</sup> 小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年。



での主体化を招くことに注目した。

まず、金史良「草深し」では、朝鮮の山村の民衆に対し、朝鮮人郡主が日本語で演説する場面において、郡主の日本語に濁音／清音の区分、「つ」の発音、ルビが書き込まれることによって「おかしな日本語」があらわれる点に注目する。「おかしな日本語」は、朝鮮人の白衣を禁止する政策の演説を滑稽なものとし、「模倣」の「差異」が拡大することになる（第1部第1章、第2部第1章）。

また第2部第5章では、朝鮮語で創作したことがない「日本語世代」の朝鮮人作家・崔秉一の作品集『梨の木』（盛文堂書店、1944年）に焦点を当てた。『梨の木』に収録された作品には、愛国班、帝國的制度に組み込まれた人びとが描かれているが、その構造の中には亀裂（「皇国臣民の誓詞」が滑稽なものとして化すこと、日本語が喧嘩の道具として用いられること）も同時に読み取ることができ、自分たちの生活の脈絡による再解釈と実践の存在が明らかにされた。

そして第3部第1章では、朝鮮人が満洲を描いた「満洲開拓小説」というジャンルと、韓雪野の「大陸」に注目している。そこでは、朝鮮人作家が満洲をどのように描くかについて論じられている。

満洲の朝鮮人を描いた小説を見てみると、中国人をめぐる蔑視を含む点が注目される。これは、在満朝鮮人が日本の満洲経営計画と、中国政府による朝鮮移民政策が交差する位置に置かれていたためである。日本は満洲に独立を求めて戦う抗日運動家を「不逞鮮人」とみなし取り締まる一方で、「善良なる日本国民」たる朝鮮人農民を保護する名目で、日本の警察権を移住地外に及ぼした。中国側は、在満朝鮮人を満洲侵略の尖兵とみなし、朝鮮人を満洲から追放する方策を推進した。尹大石は、万宝山事件を例に挙げながら、「朝鮮農民は構造的に自己の生活を確保しようと努力すればするほど日本の大陸侵略の尖兵とならざるをえなかった」<sup>41</sup>と説明した。

そのような歴史的背景から、朝鮮人は満洲を文明－野蛮の構造で見ることを通して、主体確立を行うようになった。ここには、「植民地的無意識」による朝鮮人の主体化の試みを読み取ることがで

きる。しかし尹は、そこには朝鮮人が新しい秩序を夢見る欲望も同時に存在していたとした。その上で尹は、満洲における朝鮮人の主体化は完全な臣民化とはいえず、そこに「差異」の拡大を見いだそうとした。

そこで尹は、当時の国策と、朝鮮文壇の素材の貧困から脱出したいという欲望が重なり合った所に生まれた、朝鮮人による「満洲開拓小説」というジャンルに注目する。それらの作品では、満洲は朝鮮民族の「鍛錬」「更生」「贖罪」の場として描かれると共に、満洲人は「野蛮」「無知」として表象された。ここには「植民地的無意識」による朝鮮人の主体化を読み取ることができるが、尹はそこに朝鮮では実現不可能な空間が満洲に生成されたことで、朝鮮の現実や帝国日本をめぐる批判が含まれる可能性を指摘した。その典型的な作品として、韓雪野の「大陸」（『京城日報』1940年）に注目した。

韓雪野「大陸」では、満洲国の理想である「民族協和」が描かれると共に、異民族同士の恋愛（日本人・大山、満洲人・マリー）が描かれている。マリーと大山の恋愛の描写を通して、これまで「野蛮」「無知」と表象された満洲人が具体的な人物として描かれることになる。そして他の作家が朝鮮人の主体化に重点をおいて描いたのに対し、国民国家、軍国主義が求めた女性像とはズレが見られる女性・マリーをめぐる描写、そして日本人・大山がマリーとの恋愛によって自らが変わっていったという描写が含まれる「大陸」は、帝国日本の構図の中における権力関係の打破を読み取ることができ、そこに「差異」の拡大を見ることができ

## おわりに

本書は、1940年代前半期の朝鮮人の創作を、植民地の「国民文学」という問題枠組みでとらえなおすことで、「親日」／「反日」という二項対立的な枠組みでは看過されてきた、朝鮮人の国民化と植民地における主体形成の問題を論じたものである。日中戦争、アジア・太平洋戦争を通して帝国における「国民」再定義が行われると同時に、植民地ではそれが「再構成」され「ほとんど同一だが完全には同一でない差異の主体」が形成された

<sup>41</sup> 尹大石、前掲書、p. 205。

ことを明らかにしている。具体的には、これまで民族主義言説によって「反日」とされた部分に本質主義を、「親日」として排除されてきた部分に「差異の主体」—帝国への統合（「差異の縫合」）、「嘲笑」（「差異の拡大」）—を読み取っている。

これは金哲ら『当代批評』の論者によって展開された問題意識を継承しており、いわゆる「親日文学」の分析を通して植民地における主体化の形を明らかにしたものとして評価できるだろう。さらに本書では、『当代批評』の論者が展開した主体化の「反復」をめぐる議論を、「差異の主体」へと展開し議論を深めたことが最も評価すべき点である。本書において展開された「差異の主体」の議論は、植民地期における朝鮮人の主体化の試みが常に分裂する問題を抱えていたことを明らかにしており、個々の作家の作品・評論に焦点を当てた研究も学ぶべき点が多い。

最後に、本書の議論を受け、今後の課題として考えるべき点を二点あげたい。

第一に、主体化の分裂の問題である。本書がいわゆる「親日文学」から、植民地の主体化の試みを読み取ったのは画期的である。しかし、尹の三つの主体化という議論—本質主義、帝国への統合（「差異の縫合」）、「嘲笑」のあらわれ（「差異の拡張」）—では、本書の重要な論点である主体化の分裂の問題がかえって見えにくくなってしまいう面があるのではないか。

つまり、尹自身が、「国民文学」をめぐる「再構成」が「差異の主体」を生み出すと問題設定したにもかかわらず、本書において「反復」と「差異」が区分され、別々に類型化されて論じられること—特に「差異」の拡大が第三の主体化の形として独立して論じられること—によって、問題が見えにくくなってしまいうのではないか。

第二に、朝鮮語と日本語の言語使用の問題についてである。上述の通り、本書において朝鮮語は朝鮮人作家の日本語創作を説明する際に言及された。しかし、この区分では朝鮮語使用と日本語使用を比較することで明らかになる「差異」の存在は看過される。例えば尹大石は、林和が日本語で書いた評論は、朝鮮語で書いた評論に比べて本質主義的であると指摘した（第2部第1章）が、それは断片的な指摘に留まっている。本書では林和

が日本語で書いた評論は第一の主体化の例として、朝鮮語で書いた評論は第三の主体化の例として、それぞれの章で議論が展開された（第2部第1章、第2部第2章）。

尹大石自身、本書の性格を「これまで書いてきた論文を収録したものであるため、重複する部分もあり、また互いに矛盾する部分もある」<sup>42</sup>と述べている。林和をめぐる議論については、尹大石が「互いに矛盾する部分」として自覚的であったといえるかもしれない。しかし、その「矛盾」に焦点を当てることで、主体化が歴史的状況や言語状況と関わりながら「再構成」されたことを、より深く論じることができるのではないか。

以上の二点は、本書が抱える問題というよりは、本書の議論を受けて今後行われる研究が応答していく際に問われる点である。日本においても、いわゆる「親日文学」については、90年代以降の「帝国史」研究の流れを受けて新たな研究が現れてきたことは、冒頭で述べた通りである。1940年代前半期の朝鮮人の創作を体系的に扱った尹大石の研究が、今後日本においても参照されていくことを望む。

（たかはし あずさ・東京外国語大学大学院博士後期課程）

<sup>42</sup> 尹大石、前掲書、p. 6。